



KANSAI
UNIVERSITY

CTL

Kansai University Center for Teaching & Learning

Newsletter

関西大学 教育開発支援センター
ニュースレター

March 2023

vol. 41

多様な学生の声を^{すく}掬い、 教育的課題に向き合う

教育推進部准教授 山田 嘉徳



2022年4月に教育推進部に着任しました山田嘉徳と申します。本年度より学習者中心の教育の視点から、共通教養科目の運営や新シラバス構築に向けた実務、またFD研修の企画運営等に從事させていただいています。教える体制の基盤や前提を学びの現実に照らしてしっかりと見つめながら、一人ひとりの関大生の成長をよりよく支援できるあり方を模索していきたいと考えております。

教育研究としてはこれまで、学生同士による協同的なプロセスに着目し、効果的な教育実践のあり方を探究する実践研究を進めてきました。本学大学院において心理学研究科を修了し、学位論文では大学卒業研究ゼミでの「協同的に学び合う文化」はどのように維持・継承されていくのか、という問いを主題に掲げ、学生同士の学びを支える過程を、観察やインタビューによる「学生の^{すく}声

を掬う」という学びや成長を探究する方法がもつ示唆については、学位取得後も大学教育研究に取り組む仲間と共に検討を続け、その可能性を問う仕事にあたってきました(『コロナ禍で学生はどのように学んでいたのか—質的研究によって明らかになった実態—』(編著)の刊行等)。

私にとって、「学生の声を掬う」というのは、学術的知見に根差した教育研究の一つの方法であると同時に、様々な教育的課題に向き合う視点や考え方でもあります。例えば、「学習成果」が強い論調で求められる昨今、その証拠となる資料の蓄積と開示が絶えず大学に要求されてもいます。ともすれば、大学業界において内実とは乖離した画一的な「成果」の数値化とその効果的な表現にのみ関心が向けられる場合も少なくありません。もちろん学びと成長にまつわる、経年的なデータに紐づいた知見そのもの

のは、教育改善の糸口を探るのに今や不可欠です。ただ一人ひとりの学びのリアルな過程から、DP(ディプロマ・ポリシー)をはじめ、その方針に適った教育活動というのがどのように成し得たかについて、様々な水準や多様な視点からもっと探られてよいように感じています。他方では、多様な学生を受け入れている現実や教育という営みの遅効的な効果の現れにみられる個人差を鑑みれば、それぞれに合わせた学びの支援が根付いていく土壌づくりにもまた一層の努力が求められるように思います。一人ひとりの学びと成長をより豊かに、その姿を明るくする工夫を模索しつつ、実際の教育活動に多様な学生の声を反映させ、本来的な学習者中心の教育の実現に向かう『調和』もまた、向き合うべき大切な教育的課題として捉え、その実践と支援にしなやかに取り組んでいきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

活動報告

第28回関西大学FDフォーラム

日程：2022年12月10日(土)

「小学校・中学校・高校・大学を通じたライティング力の育成
—探究学習を主軸とした学習環境のデザイン—」を開催しました

ライティングラボ開室10周年を記念して、本FDフォーラムでは関西大学が初等・中等・高等教育の場で実践している「探究学習を通じたライティング力の育成をめざした教育の展開」を取り上げました。ライティングラボの生みの親は、文学部の先生方です。文学部の先生方が学生の卒論執筆を支援する卒論ラボを整備され、その後、全学部に展開する段階で教育推進部が引き継いでライティングラボを運営しています。開室当初は利用者が少ない状態でしたが、現在は1,300件を超える利用者がおり、利用者アンケートの満足度は約99%となっています。またライティングラボはチューターと学生の個別相談に限らず、出張講座、ワンポイント講座、自主学習用のレポートの書き方ガイド・eラーニングの提供、併設校との連携を実施し、組織としても発展しております。フォーラムではこのような「ライティングラボのこれまでとこれから」について、まずは中澤務氏(関西大学教育開発支

援センター長)より報告がありました。その後、大西洋氏(ライティングラボ アカデミック・アドバイザー)より「大学における授業実践でのライティングラボの活用」について報告がされました。次に、学園内の併設校におけるライティングに関わる授業実践や大学との連携事例を各校種の教員が紹介しました。堀力斗教諭(関西大学初等部)からは「ごんぎつねを題材にしたクリティカルリーディングと論理的な文章作成の取り組み」について、松村湖生教頭(関西大学中等部)からは「理科の実験を通じた書く力の育成」について、水田眞一教諭(関西大学北陽高等学校)からは「書く意欲を高めるための探究

学習の導入」について報告をいただきました。参加者からのアンケートでは高い評価をいただき、フォーラム企画者としては嬉しい限りです。ご参加いただきました先生方ありがとうございました。これからも学生のライティングラボの利用、先生方からの学生への利用指示をよろしくお願いいたします!

(教育推進部教授 岩崎千晶)



FDフォーラムの様子

2022年度FD/SD研修

「対面・遠隔授業の効果的な共存を考える

日程：2022年10月24日(月)、11月7日(月)、
11月21日(月)、12月5日(月)、12月19日(月)、
2023年1月16日(月)

～DPを達成するためのよりよい授業形態～」を開催しました

教育開発支援センターでは、2022年10月24日(月)～2023年1月16日(月)の間、2022年度FD/SD研修を開催しました。本研修は、次世代を担う学生・教育職員・事務職員が連携して、学生・社会のニーズを認識し、これから取り組むべき課題を発見する能力と、社会の変革に対応し、時代に即した教育を展開するため、三者それぞれの役割と連携の重要性を認識する能力を育成することを目的としています。SD研修としては、2017年度から実施しており、今年度で6年目を迎えました。

本研修は、講義とグループワークを組み合わせ、5回実施し、さらにその成果発表として、計8グループ(学生、教員、職員の混合)による最終報告会の機会を設けました。各回の講師は教育推進部の教員やIRを担当する事務職員が担当し、参加者側に加え、運営側にお

いても、「教職協働」で実施しました。講師それぞれの専門領域に基づく大学教育の現状や課題、授業実践などを含め、今後の展望等についてご講演いただきました。

1月16日(月)の最終報告会では、「DPを達成する」ということを念頭に、効果的な授業形態について各班で検討しました。当日は、質疑応答だけでなく、教育推進部の教員からのフィードバックもあり、深い内容まで議論を交わすことができました。

各班の報告内容は、以下のQRコード、URLからご確認ください。

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/topics/2022fdsd.html>



(教育開発支援室 西村瑛皓)



FD/SD研修の様子

「学生の主体的な学びを促すシラバスの作成方法に係るFDセミナー」を開催しました

日程：2022年12月14日(水)
2023年1月11日(水)

12月14日(水)と1月11日(水)の2回にわたり、「学生の主体的な学びを促すシラバスの作成方法に係るFDセミナー」を開催しました。2023年度から対面授業が原則となり、遠隔授業から対面授業となる科目や他の科目との関連などをふまえ、担当科目のシラバスを見直す機会としてとらえていただきたいとの思いから本セミナーを企画しました。

当日は、参加者に持参していただいた自身のシラバスをブラッシュアップするためのグループワークを実施しました。グループワークでは各テーブルに教育推進部の専任教員が加わり、学生の主体的な学びをどのように促すのかなどについて、活発な意見交換がなされました。セミナー終了後も熱心な質疑が交わされ、有意義な場となりました。

(教育推進部准教授 山田嘉徳)



FDセミナーの様子

関西大学北陽高等学校との連携講座「キャンパスライフ直前講座」を実施しました

日程：2023年1月26日(木)

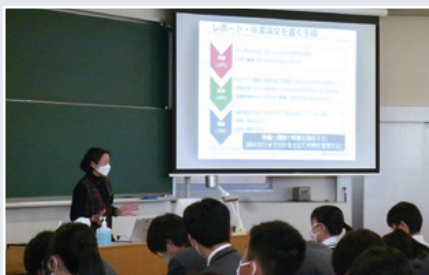
1月26日(木)に関西大学北陽高等学校と連携し、2023年度の新入生を対象に「キャンパスライフ直前講座」を開催しました。大学生活や学習のイメージを持ってスムーズなスタートを切ってもらうことを目的に、講義の受け方、レポートの書き方、履修計画の立て方について講義とワークを実施しました。

事後アンケートでは、239名の生徒のうち、内容に「満足」、「どちらかといえば満足」と回答したのは95%でした。「実際にノートを取ってコツを学べた」、「レポートの書き方等のイメージが掴め

た」、「どのように履修登録すればいいのかを理解できた」、「大学での生き方などの不安がやわ

らいだ」などの感想が多数寄せられました。

(教育推進部特別任用助教 張 暁紅)



講座の様子



講座の様子

授業アンケート実施結果について

授業アンケートの実施結果についてはWebでご確認いただけます(表データ参照元)。
<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/support/questionary/>

2000年度に授業評価アンケートを開始してから、内容や方法に改善を加えてきました。2011年度にはCS分析の手法を採用入れ、重点的に改善すべき箇所を個々の教師が把握できるようにしました。このように、しばらくは教師のパフォーマンスを問うスタイルを継続していましたが、「From Teaching to Learning」というFDのパラダイムシフトに鑑み、2020年度からは学生が自らの学習を振り返る項目を追加し、名称を授業アンケートに改めました。学生の学びを創発する教師の営みについて個々の教師に考えてほしいという願いが込められています。右に20年度春学期から22年度春学期までの授業アンケートの概要を示しました。

アンケートに答えているのは学生の4分の1から3分の1程度です。以下の内容は学生全体の傾向を示すものではないということに留意してください。

いずれの学期も「授業の進捗」に対する学生の満足度が最も高く、これを適切だと判断した学生は回答者の8割を超えています。これに対し、「授業時間外学習の実施」がどの学

期も最も低くなっています。「授業目標の達成度」がこれに続いて常に低い値となっています。授業外学習時間が1時間に満たない学生は今年度春学期には回答者の8割を超えています。20年度春学期には目標を達成したと自己評価する学生は回答者の2割にも至りませんでした。その比率は少しずつ増加していますが、それでも3割前後の低位で推移しています。

学生は授業がシラバス通りに進められていることや進捗に満足を感じているようですが、さりとて授業時間以外に自己学習することをほとんどせず、多くの

学生が授業目標を達成できていないということを読み取ることができます。学生の豊かな学びを実現するためにシラバスの順守や進捗への配慮以外に何に留意し、どのような工夫が必要なのかを考えていかなければなりません。

(教育推進部教授 三浦真琴)

#	質問内容	2020春	2020秋	2021春	2021秋	2022春
1	授業の進捗	4.59	4.53	4.54	4.58	4.55
2	授業の難易度	3.99	4.06	4.06	4.16	4.10
3	シラバスに沿っていたか	4.32	4.41	4.43	4.47	4.52
4	学生の理解度の確認	3.87	4.10	4.10	4.21	4.22
6	授業時間外学習時間	3.06	2.57	2.68	2.65	2.55
7	取り組む意欲	4.21	4.16	4.23	4.21	4.24
8	授業目標の達成度	3.80	3.83	3.87	3.92	3.95
回答率(%)		35.4	32.7	32.4	25.8	30.8
1	進捗を適切と判断した学生(%)	82.5	81.0	81.3	83.1	81.5
6	学習時間1時間未満の学生(%)	66.4	80.9	78.5	79.7	81.5
8	目標を達成できたとする学生(%)	19.5	25.8	27.0	30.5	31.7
5	授業で工夫して 特にない(%)	56.2	61.4	61.5	62.9	61.8
	ほしい点 説明の仕方(%)	15.4	12.8	12.6	11.5	12.2

※上8項目は5段階評価。上位を暖色で、下位を寒色で表す。

※左の番号はアンケートの質問項目の番号。

※回答率より上が評価値の平均。下が構成比。

学生ラーニングCaféを実施しました

2022年度11月から12月にかけてLAの情報交換会を曜日や時間をずらして4回開催しました。担当授業が異なるため普段は会えない現役LA同士が新しいアイスブレイクの方法を教えあったり教員ごとに授業でのLAの

役割が違うことについて気付いたりしながら楽しく過ごしていました。また、これからLAになりたいと考えている学生も交流会に参加し、LA活動のやりがいや楽しさを知ることでLAへの志望動機を新たにしていたようです。

LAたち自身が交流することでサポートスキルを学べる機会を次年度以降も持続的に提供していきたいと思います。

(教育開発支援センター アドバイザリースタッフ
上島洋一郎)

学生ラーニングCaféの感想

LAの授業で一緒にいた先輩の誘いから始めたラーニングCaféの企画・運営は0から1を生み出す作業の連続で、誰かの役に立つ、参加者及び企画側が楽しいかを軸にイベント内容を考えています。イベント

毎で出会う参加者とのなにか特別な縁を感じながら、自身も成長できる場としてラーニングCaféは私の「ガクチカ」となっています。

(商学部3年生 福島由唯)

教学IRプロジェクト活動報告

2022年度教学IRワークショップ 「関大の現状を知り、未来を考える」を実施しました

日程：2022年12月15日(木)

教学IRプロジェクトでは、本学の現状に関するデータに基づき、魅力的な教育・学習環境の創造に資する取組を協働的に考える場づくりの一環として、表題のワークショップを12月15日(木)に開催しました。教学IRプロジェクト関係の教職員のみならず、一般教職員にも周知し、10名(教員1名、職員9名)の方にご参加いただきました。話題提供(山田・川瀬)に続き、「関西大学においてNPS(Net Promoter Score)を高めるためには、どんな教育や学習環境、学生支援の生徒や仕組み

等が効果的だと考えるか」について議論し、最終的に「3つの提言」としてまとめて、全体共有を行いました。参加者へのアンケート(9名)から、話題提供の参考度100%、グループワークの有意義度100%など高い評価を得ることが出来ました。「職員研修の一環として開催してはどうか」「アンケート作成や分析力向上に資する研修があると良い」といった声も寄せいただき、継続的に企画していきたいと思っています。

(教育推進部教授 山田剛史)



教学IRワークショップの様子

教育開発支援センターからのお知らせ

教育開発支援センター Web サイト内に 「教員インタビュー」ページを開設しました

今年度リニューアルした教育開発支援センターウェブサイト内に、「教員インタビュー」ページを開設いたしました。本ページでは、授業に関する取り組みについて、本学教員に行ったインタビュー内容を掲載しています。実際の授業実践や工夫をGood Practiceとして広く公開し、未だコロナ禍で授業の実施方法について模索が続く中で、今後の授業運営およびFD活動に役立てていただくことを目的として作成しました。今回掲載した5名の先生

方には、遠隔授業における授業実践や新たな取り組みを中心にお話しいただいております。是非ご覧ください。

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/support/interview/>

【アクセス方法】 教育開発支援センターWebサイト> 授業のサポート>教員インタビュー



(教育開発支援室 上田果歩)



From CTL事務局

近年、感染症の拡大と縮小を繰り返す中で、大学における授業形態が目まぐるしく変化した。遠隔授業の存在が稀なものではなく、知識や技能の修得を目的とした授業は振り返り学習ができるという利

点から遠隔形式を採用し、思考力や表現力などの修得を目的とした授業は対面形式で実施するというような「併用型カリキュラム」を実現する教員が増えたのではないかと感じる。

「併用型カリキュラム」の実施にあたっては、受講環境の確保や機器操作のレクチャーなど、従

来の大学では起こりえなかったさまざまな課題が存在する。このような諸課題に対し、学生・教員・職員が互いの声を聴き合い、三者協働で解決に向かうことができるような機会の創出が求められていると考える。

(クマ)



KANSAI
UNIVERSITY

関西大学 教育開発支援センター Kansai University Center for Teaching & Learning

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL: 06-6368-0230 FAX: 06-6368-1514

<https://www.kansai-u.ac.jp/ctl/index.html>

発行日/2023年3月24日 編集・発行/関西大学 教育開発支援センター